方言分布から見た大井川・安倍川流域
ー大井川・安倍川流域言語地図からー

木川行央
神田外語大学

大井川・安倍川両流域は、日本語の東西方言の境界を考える上で、注目すべき地域である。両河川とも江戸時代には橋がなく、また船での川越えも許されていなかった。また、大井川は、遠江と駿河の国境となっており、明治時代以降も郡の境界となっていた。本稿では、この地域において行われた言語地理学的調査の結果から、この地域が方言の分布の上からどのような特色を持っているのかを考察したものである。その結果、従来の報告にもあるが大きな障害となるであろうと予測される大井川自体はほとんどの場合境界とはなっていない点、安倍川の支流である藁科川流域と大井川中・上流域に共通する現象が認められる点、大井川流域は、静岡市井川地区と本川根町の境界、川根町と島田市・金谷町の境界という二つの地形の上での境界が現在の方言の分布の上でも境界になることが多いという点、さらに下流域においても行政区画の境界が現在の方言分布の境界と重なることが多い点等が確認された。

1．はじめに

大井川は、静岡県の中部を流れており、かつて遠江と駿河の国境となっていた川である。そして本州の中央部を流れるこの川の流域およびその周辺は、方言の面では、日本の東西方言の境界線を考えるとき重要な意味を持つ。従来日本の東西方言の境界線として最もよくあげられてきたのは糸魚川と浜名湖を結ぶ線である。しかし、境界線は一本ひかれるのではなく、事象により様々な境界線がひかれる。特に太平洋側は、事象による異なりが大きく、大井川流域にも境界線がひかれる事象があるとされる。この大井川流域および大井川の東を流れる安倍川流域における本格的な言語地理学的調査としては、現在の所、1974～1983 年静岡大学方言研究会によって実施された調査があるのみである。この調査の報告は、安倍川流域については中條修編(1982)によってなされているが、大井川流域についてはまとまった報告はなされておらず、安倍川の結果と合わせる形で木川行央(1997、1999、2000、2001)によって発表されている途中である。本稿は、この調査の結果から大井川・安倍川流域を方言の面から見ていこうとするものである。

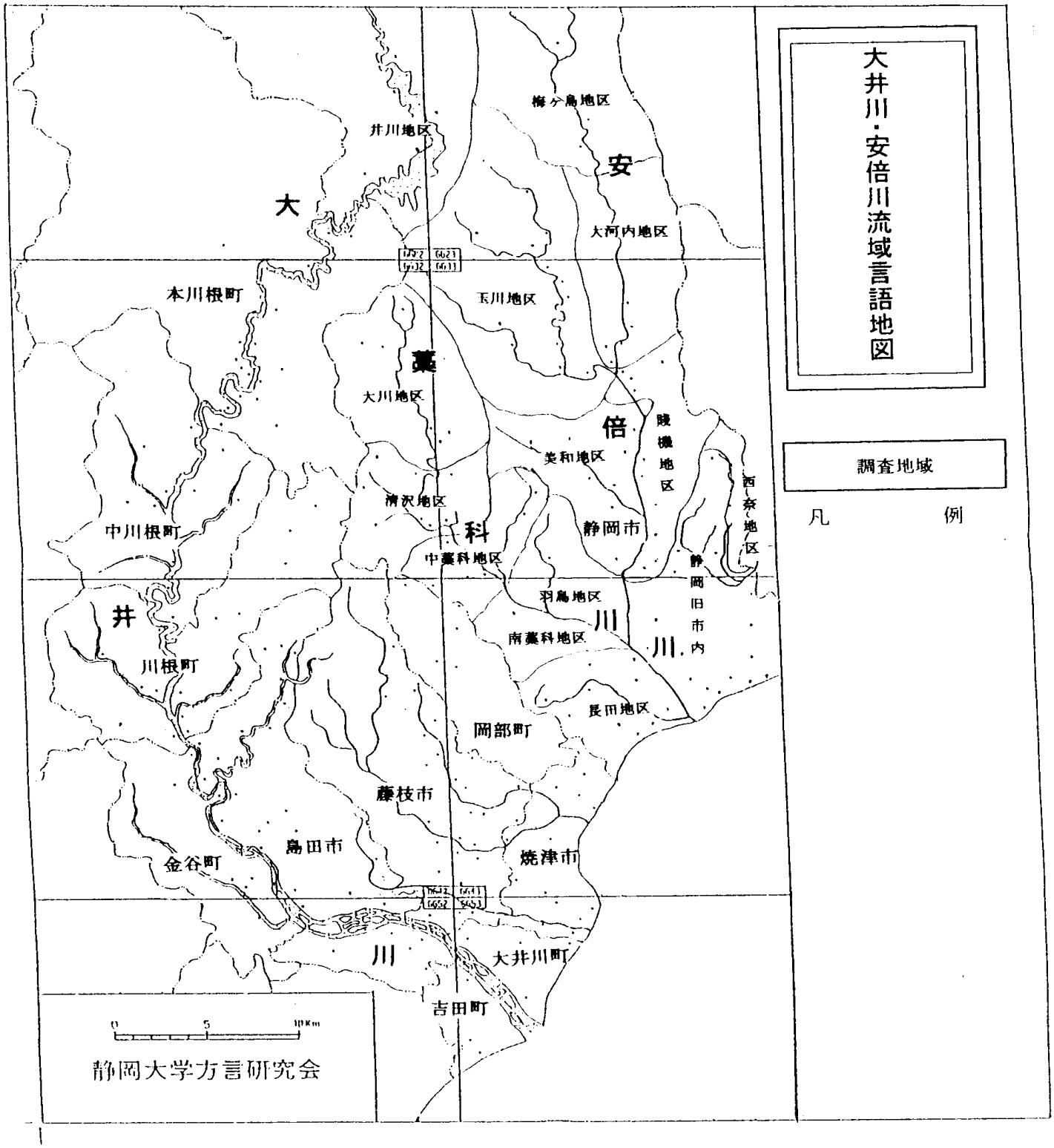
2．地域の概要

大井川・安倍川は、ともに赤石山脈を源流とする急流であり、それぞれ下流域に扇状地をつくり、駿河湾に流れ込む。両河川ともいくつかの支流を持つが、大井川と安倍川の中・上流域では、両河川の流域間はもちろん各川の支流同士の間も高い山で隔てられている。また、中・上流域には平坦な土地が少なく、集落はいずれの地域でもほぼ川沿いにのみ見られる。さらに交通面では、中・上流域の集落を結ぶ現在の主要幹線は川沿いに走っており、かつても川沿いの道が用いられていた。しかし、その道はあまり整備されておらず、現在の井川地区と本川根町の境界にある接阻峡のような難所もあった。そのため、大井川の中・上流域からは、東の静岡や西の森町・南の藤枝等へ行く山越えの道が、安倍川最上流の梅ヶ島・大河内地区からは、やはり峠を越えて甲州側に越える道が、明治時代まで頻繁に用いられていた。

また、江戸時代、大井川は架橋も船による渡河も禁じられ、徒渡しと定まっていた上、川越人足を使いかつ定められた場所を渡ることしか許されなかったところである（ただし、地元の住民には、桶越しといわれる桶を使った川越え、あるいは歩行による川越えが認められていた）。同様に、安倍川も徒渡しのみが認められていた川であり、大井川・安倍川に橋が架けられるのは明治時代になってからのことである。また、大井川では、上流から下流域への舟の運航も認められておらず、高瀬舟が就航するのは、明治になってからである。鉄道は、昭和６年に金谷から本川根町千頭までの大井川鉄道が全通する。しかし、最上流の井川地区まで鉄道が延びたのは昭和 34 年のことである。安倍川も同様に、まず川船が用いられるようになり、道路も次第に整備されていった。さらに大正時代には、軽便鉄道が作られたが、これは昭和初期バスに取って代わられた。このように両河川とも次第に川の上流と下流を結ぶ交通路が充実発展していったわけであるが、その間も山越えの道は用いられていた。大井川筋から山を越える道の話は、この調査の話者となっていただいた方々からも聞かれた。また、最近では山越えの道が整備されつつあり、改めてこの経路の重要さがましてきつつある。

行政区画の面で言えば、前述のように大井川は遠江と駿河の国境となっていた。ただし、大井川は河道が時代と共に変化しており、下流域では、現在よりも東を流れていた時期もあると考えられている。現在は左岸の大井川町周辺が右岸であった時期、すなわち遠江に含まれていた時期もあった。現在のような河道になったのは、南北朝頃であると考えられている（『角川日本地名大辞典 22　静岡県』等）。この、行政区画の境界線としての大井川は、明治以降も志太郡（左岸）と榛原郡（右岸）の境界として残っていた（ただし、大井川最上流の井川地区は、安倍川流域と同じく旧駿河国安倍郡であり、現在も静岡市に含まれる）。しかし、昭和 30～31 年にかけ、右岸の村と左岸の

図１　調査地域地図


大井川・安倍川流域言語地図
調査地域
凡　例
大
井
川
安
倍
川
藁
科
川
井川地区
梅ヶ島地区
大河内地区
本川根町
玉川地区
大川地区
美和地区
陵機地区
西奈地区
清沢地区
中川根町
静岡市
中藁科地区
静岡旧市内
羽鳥地区
南藁科地区
川根町
長田地区
岡部町
藤枝市
島田市
焼津市
金谷町
大井川町
吉田町
0　5　10Km
静岡大学方言研究会

村が合併して、榛原郡本川根町・中川根町・川根町という大井川の両岸にまたがる町ができ、現在では榛原郡は左岸にまで広がっている。

さて、行政面で昔から境界となっていた大井川は、歴史的・民俗的な面でも境界となる場合があるという報告がなされている。たとえば、野本寛一(1979)では、以下のような点で大井川の左岸と右岸に違いが見られるとしている。

1　大井川左岸以東には縄文的特徴を濃厚に持つ土器が出土し、一方右岸以西においては弥生式土器が出土する。

2　大井川以東の晦日餅、ツボ餅に相当するものは以西にはない。

3　以西の初凧あげが以東にはない。

4　小正月の作りものが大井川以西では「ニュウギ(オニギ)」といって松や樫の割木に十二月と書いたものであるのに対し、以東では粟穂、稗穂。

5　本川根町梅地にある梅津神楽と同系の神楽が同町田代・坂京・青部、中川根町徳山、川根町笹間、藤枝市蔵田・滝沢と左岸に分布し、藁科川流域とも深くかかわるが、本川根町中川根町、川根町と右岸を下っても同系の神楽は見られない。

6　雛人形が大井川以西は三河系の土天神、以東は、オガクズを糊で固めた駿河天神(志太天神)が分布(榛原郡吉田町には一部駿河天神が見られる)。

7　「風呂鍬」(先端の部分だけに鉄をはめた木鍬、大井川流域では「ヘラ鍬」)の型が、大井川右岸では「丹波ベラ」(鍬の表面に盛り上がりがある)、大井川左岸では「平ベラ」(柄を受ける部分の厚みが鍬の裏側にある)。

ただし、厳密な意味で大井川が境界になっているのか、またこれらがどれだけの広がりを持つ現象であるのかについては不明である。しかし、大井川あるいはその流域が文化的な面においても境界となる場合があるという点は確認できるであろう。

これに対して、安倍川は行政区画の点では村の境界となっているところもあるが、国や郡のレベルの境界にはなっておらず、また文化的な面でも大きな境界となるものではないようである。

3．否定表現・連母音・アクセントの境界

上記のような、文化的・行政的な面における境界としての大井川が、言語の面でも境界になっているのではないかということは、当然予測される。従来の報告で、東西方言の境界線がこの付近にあるとされている事象に、否定の形式ナイとンの境界線がある(牛山初男 1969 等)。ここでは今回の調査に

基づいてナイとンの分布状況を見てみよう。

牛山(1969)では、その境界線について以下のように記されている。

> (ない)(ないの変形ねえ、ねを含む)を純粋に用いて居る西限は、北は新潟県の中蒲原、東蒲原の西境より(中略)山梨県に入り、東山梨、西八代の東境を経て、静岡県の富士郡庵原郡の西境に連なる線である。これに対して、行かん(ぬ)をほぼ純粋に用いる境界線は新潟県の中頸城の東境より(中略)長野県では北安曇、南安曇、東筑摩を経て下伊那を中断し、静岡県に入り榛原郡の東境を大井川が海に注ぐ線であるが、静岡、愛知の諸県においてはかなりないの混用が(中略)見られる。(中略)このない、ん(ぬ)両系の境界線を設定するならば、北は新潟県の中蒲原、東蒲原の西境より(中略)静岡県の富士、庵原の西境を連ねる線をもつてない、ん(ぬ)の境界線とすることが出来るであろう。(牛山初男 1969　pp. 3-4)

今回の調査結果を示した図２では、併用のナイが省略されている。否定の形式は、上記引用にもあるように併用の地域が広くまた共通語の影響等もあり、明確に使用するかしないかという形で境界線を引くことは出来ない。そこで、この地図ではンの使用に焦点を当て、今回の調査でンが回答されたかナイのみであったかということを示した。この地図で見ると、境界線は上流から下流に至るまで、大井川より東にあり、かつ、安倍川流域の藁科川流域にもわずかではあるが分布している。この、ナイとンの境界が下流域では大井川ではなく、島田市と藤枝市の境界附近であることは、山口幸洋(1982)等でもすでに指摘がある。このように島田市と藤枝市の境界が言語事象分布の境界となる理由として、山口幸洋(1995)は、「江戸時代は幕府によって、ここ(引用者注：大井川)を交通の難所として温存するより、交通円滑化のために連台、渡船といった利用策が取られて、むしろ対岸同士の交流が計られたものであったことが無視できない」、そして「現時点の境界線そのものにも歴史に由来する風土習慣の差があ」り、「藤枝／島田間は田中藩／天領(中略)といった江戸期の藩領もさることながら、それ以前の益頭荘／稲葉荘(中略)の荘園時代があった」(p. 190～191)ことが考えられるとしている。

一方上流域は両川ともノー・ノが分布している(なお、安倍川流域ではノーとノが地域的なまとまりを示しているが、井川地区を除く大井川流域では必ずしもまとまった分布をしているとはいえない)。この分布から、ノー・ノが古く分布していたところへ、ナイとンがそれぞれ東西から伝播してきたと考えられる。

次に、やはり大井川付近に境界線があり、かつ言語の根幹的な部分に関与

図２　否定

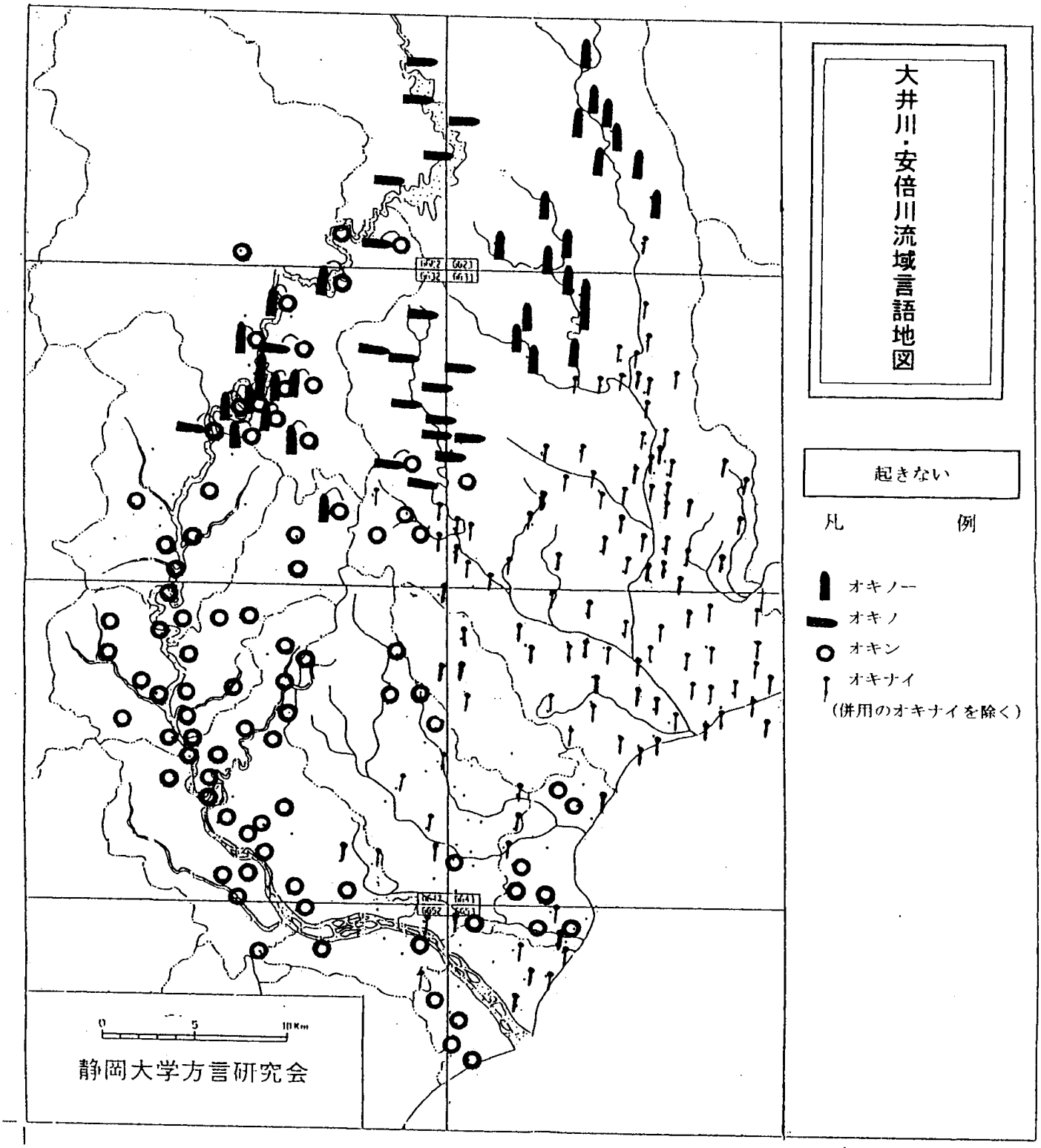
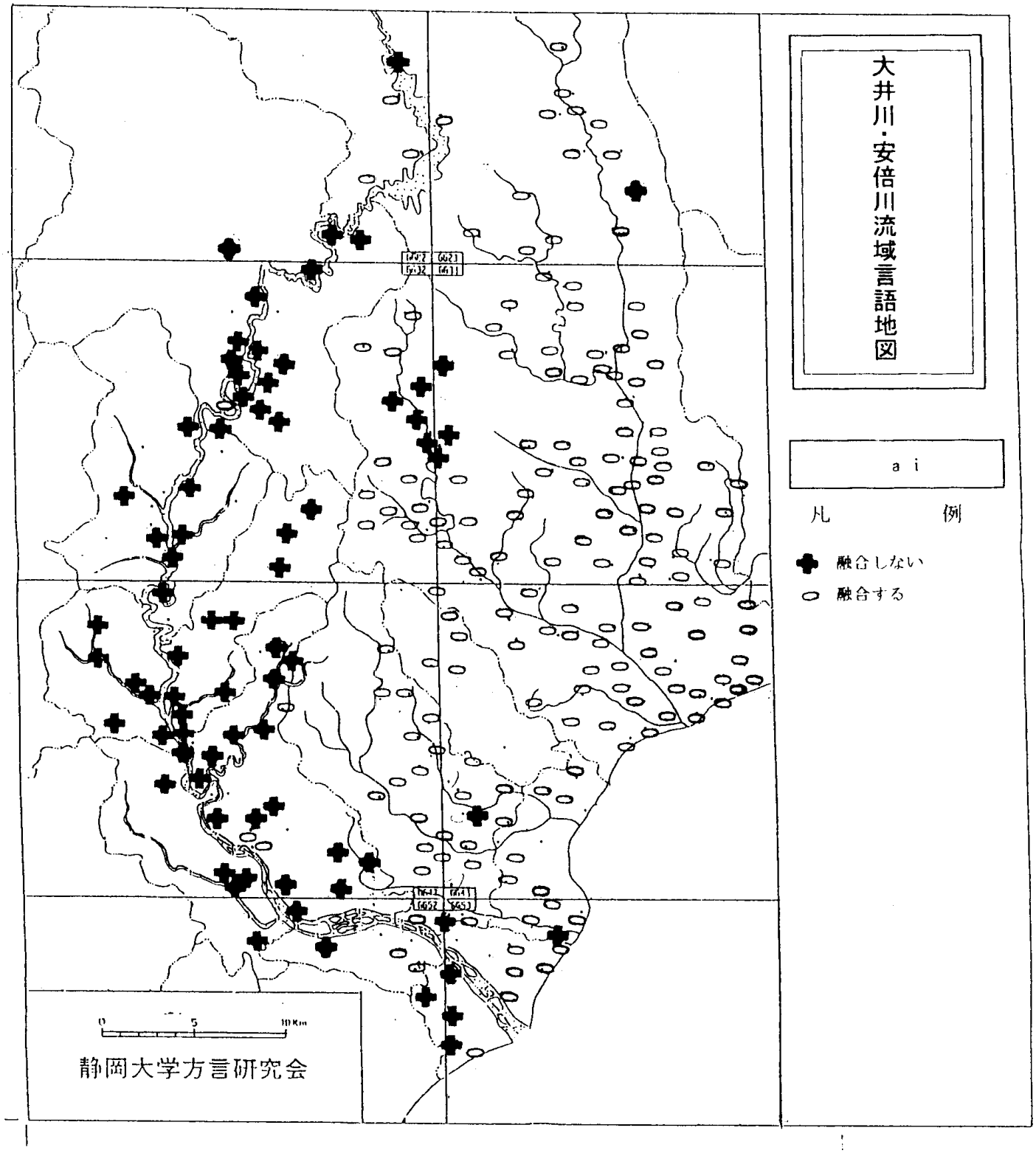

大井川・安倍川流域言語地図
起きない
凡　例
オキノー
オキノ
オキン
オキナイ
(併用のオキナイを除く)
0
5
10Km
静岡大学方言研究会

図３　連母音ａｉ



する現象として連母音 ai の融合の有無を示す地図をあげる(図３)。これも、明確にその有無を言うことはできず、中間的な音声の問題もあるが、この図では否定の形式と同様、調査において融合する形が現れたか否かで示してある（もちろん融合する地域でも、場面や語の種類等によって、融合しない形も用いられる)。さて、融合しない地域は、否定でンが用いられる地域よりやや西によっているが、大井川の左岸にもありかつ藁科川流域にも見られる点で共通する(否定の形式の場合も同様であるが、藁科川流域にある点や島田市北部にもある点等からも、前記南北朝以前の大井川の河道とは関係ないとして良かろう)。一方、大井川最上流の井川地区のほとんどの地点では融合を起こしており、これは安倍川流域の多くの地点と共通する。しかし、井川でも最上流の地点は融合しておらず、もとは融合しなかったが、安倍川流域からの影響により融合するようになったと考えることができよう。なお、中條修(1984)では、融合が広く行なわれる地域と一般に認められない地域の境界を「概略静岡市井川から藤枝市の西側を通り、大井川町までを結ぶ線であり、その線より以東は融合地域、以西は非融合地域というきれいな対立を示す」(p. 71)としている(ただし、同論文でもこの地域より以東の地域、以西の地域共に例外となる地点があることが指摘されている)。また同論文では、静岡市内における ai の発音の変遷について、非融合から過渡的段階を経て融合長音化に至る、そしてそれは地理的な分布の上にも現れている、としている。すなわち、融合する地点が圧倒的に多い安倍川流域でも、かつては融合を起こしていなかった。それが、下流域から次第に融合するようになったとするわけである。下流域で融合を起こすようになった原因については言及していないが、安倍川流域以東は融合の起こる地域であり、そこからの伝播も考えられよう。なお、連母音 oi も同様の分布をする。

さらに大井川の中流域の南部以南は含まないが、大井川の中流域北部(川根町笹間川上流域および中川根町北部)から最上流の井川地区までと藁科川流域に共通する現象に、アクセントがある。藁科川流域を除く安倍川流域と大井川下流域はともに東京式アクセントの地域であるが、大井川中・上流域と藁科川流域は無アクセントの地域である（なお、中川根町には無アクセントの地点のほかに東京式の変化した特殊アクセントの地点もある)。

この他、大井川最上流の井川地区と藁科川上流域に共通の現象として、語中の g 音がある。この地域以外では鼻音になるが、この地域では閉鎖音ないし摩擦音、あるいはこれらと鼻音の併用となる。また、より狭くなるが、大井川上流の井川地区と本川根町、藁科川上流の大川地区に共通する特徴として、/g, z, d, b/という有声子音の前に、強め（アメッダ＜雨だ＞・イカッザー＜行こう＞）の、ないし共通語の撥音に対応する(サッジョー＜三升＞・ビッボー＜貧乏＞)促音が現れるという点もある（中條修・鈴木暹・山口幸

洋 1981、中條修 1983 等)。

以上のように、言語の根幹的な部分に地域差が見られるが、これらが現在のような状態になった経緯は同じではなく、それぞれ異なる経過をたどったと考えられる。たとえば、アクセントは、型の数の区別が多から少へ、有から無へ変化するものであると考えれば、無アクセントの地域は最終的な段階すなわち最も新しい姿を示している。また、無アクセントは東日本全体に共通する特徴でもない。一方、連母音 ai の融合は、東日本に広く見られるが、この事象の場合融合しないのがもとの姿と考えられる。そうすると大井川流域の方が古い姿、安倍川流域が変化した状態となる。さらに、否定は、上流域は大井川流域も安倍川流域もノ(ー)で共通し、その後東からナイが、西からンが伝播してきたと考えられる。上流にかたよるという点では無アクセントと同じだが、前述のようにアクセントは新しい姿であるのに対し、ノーは古い形式である。なお、ナイとンのいずれが新しいかということは判断できない。

いずれにしてもこれらは根幹的な要素に見られる相違であり、大井川中・上流域と藁科川流域は、行政的な区画の面では異なっていても、強い結びつきを持っており、藁科川流域はもともとは、大井川中・上流域と一つの文化圏を作っていたと見てよかろう。

4．語彙項目の分布

次に、個々の語彙項目の分布について検討する。結論から言えば、この調査の語彙項目において、境界線を大井川より東に考えるとしても、大井川流域全体と、安倍川流域全体が対立するような項目は認められなかった。しかし、中・上流域ないし下流域で両地域が対立する場合は以下のようにある。

A　大井川中・上流域に分布する語と安倍川中・上流域に分布する語が対立

この例としては、「金蛇」(図４。この地域では「蜥蜴」と「金蛇」を語形の上で区別することはあまりないが、方言形が多く、また実際に目にする機会もより多い「金蛇」の地図を示す。なお、併用のトカゲは省略してある)がある。この項目の場合、大井川中流域にトッカギ、上流域にトッカゴ、安倍川中・上流域にはトッカゴ・トッカゲ・トッカゲローが分布している。そして、両下流域には、ヘービバンバーないしバンバーヘービが分布している。大井川上流のトッカゴについて、木川(2001)では、トッカギの分布する地域に安倍川流域から伝播してきたものと考えた。すなわち、大井川流域ではトッカギが、安倍川流域ではトッカゴないしトカゲ・トッカゲが分布し対立していたというのが以前の状態であったと考えたわけである。この他に、「馬鈴薯」を表すニドゴが、大井川中流域のみに分布しているが、これはおそら

図４　金蛇

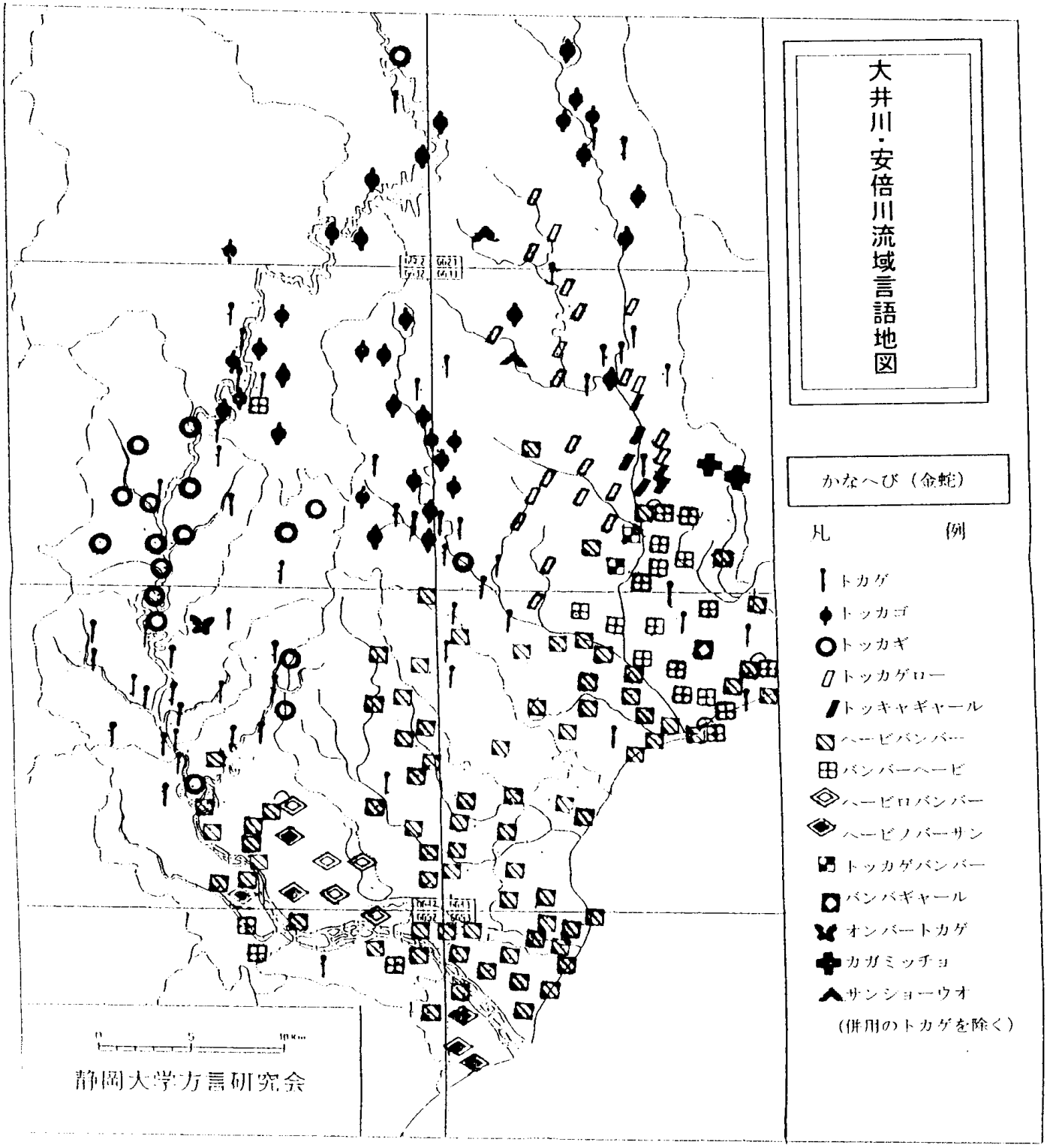

大井川・安倍川流域言語地図
かなへび（金蛇）
凡　例
トカゲ
トッカゴ
トッカギ
トッカゲロー
トッキャギャール
ヘービバンバー
バンバーヘービ
ヘービロバンバー
ヘービノバーサン
トッカゲバンバー
バンバギャール
オンバートカゲ
カガミッチョ
サンショーウオ
（併用のトカゲを除く）
静岡大学方言研究会

図５　蟷螂

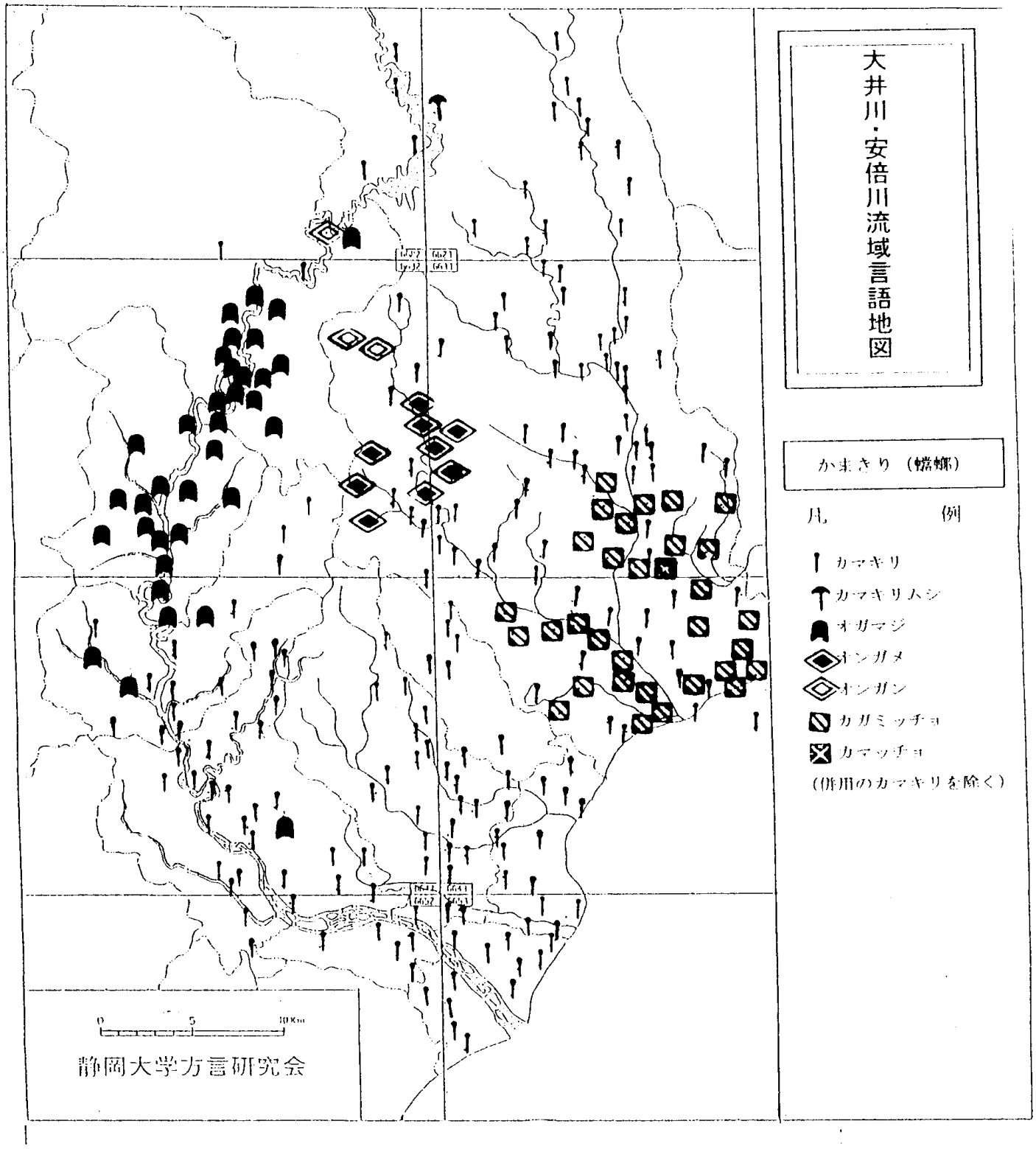

大井川・安倍川流域言語地図
かまきり（蟷螂）
凡　例
カマキリ
カマキリムシ
オガマジ
オンガメ
オンガン
カガミッチョ
カマッチョ
（併用のカマキリを除く）
静岡大学方言研究会

図６　蟋蟀

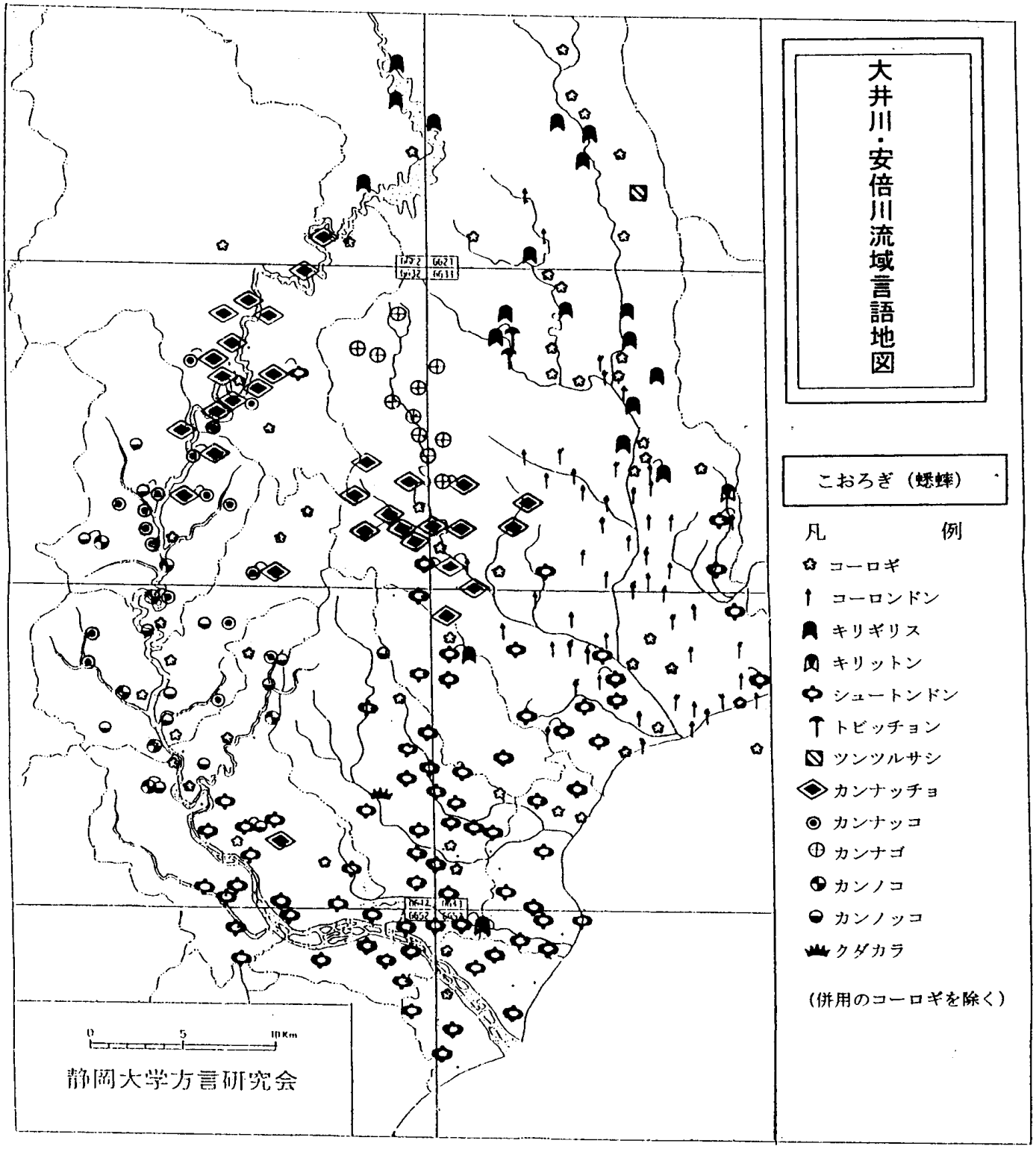

大井川・安倍川流域言語地図
こおろぎ（蟋蟀）
凡　例
コーロギ
コーロンドン
キリギリス
キリットン
シュートンドン
トビッチョン
ツンツルサシ
カンナッチョ
カンナッコ
カンナゴ
カンノコ
カンノッコ
クダカラ
（併用のコーロギを除く）
0
5
10Km
静岡大学方言研究会

図７　鼾

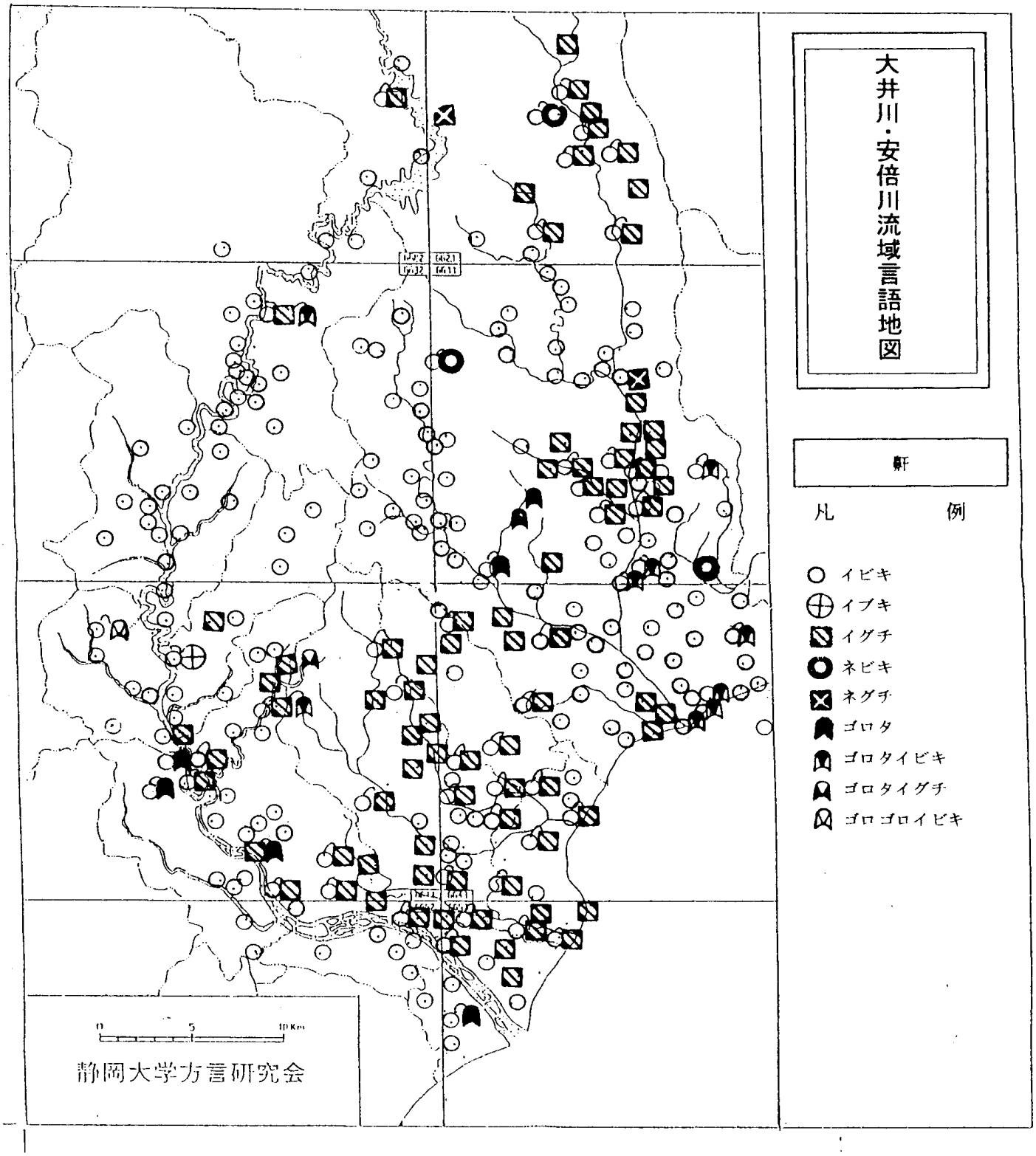

大井川・安倍川流域言語地図
鼾
凡　例
イビキ
イブキ
イグチ
ネビキ
ネグチ
ゴロタ
ゴロタイビキ
ゴロタイグチ
ゴロゴロイビキ
0
5
10Km
静岡大学方言研究会

図８　蝸牛

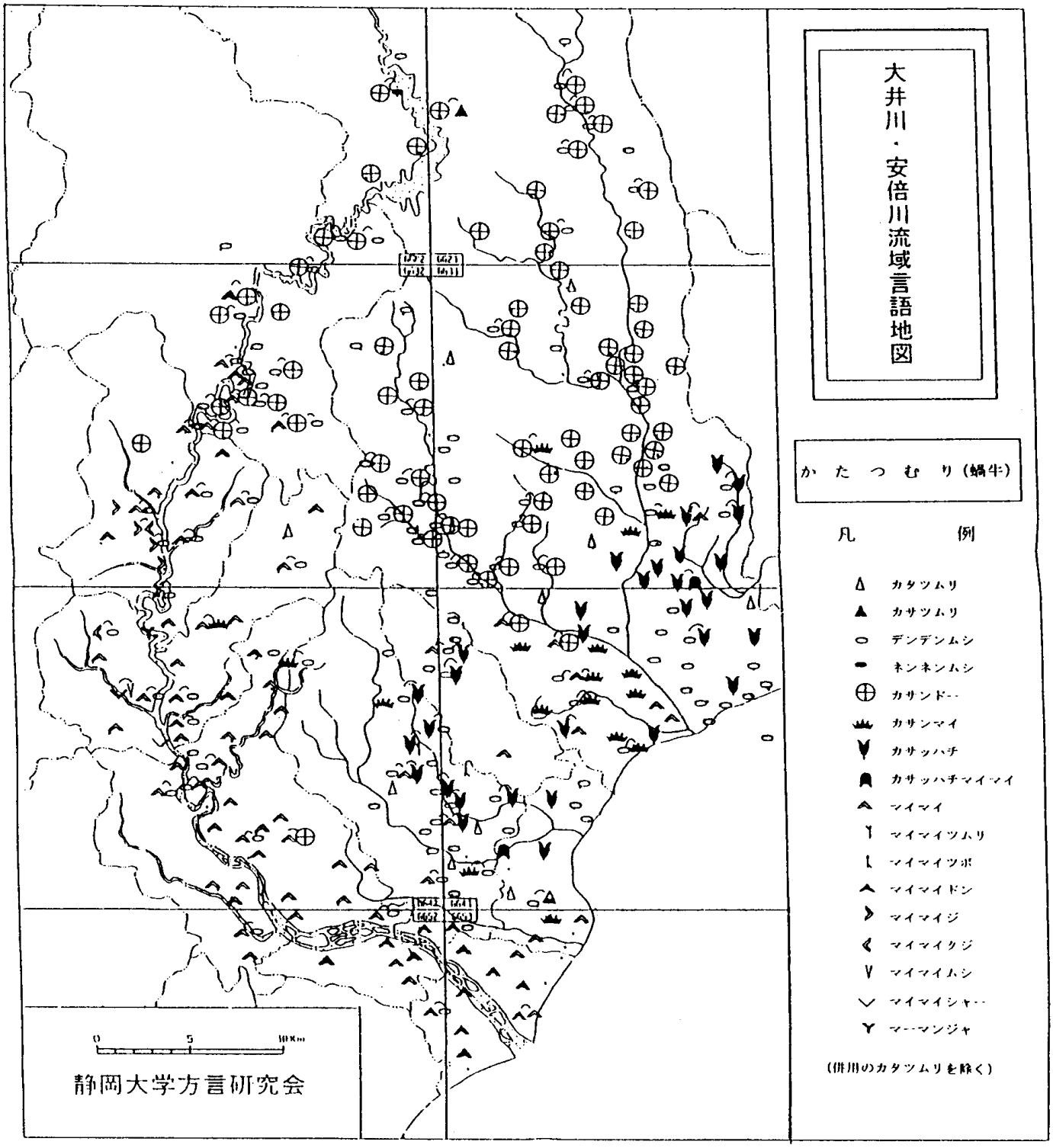
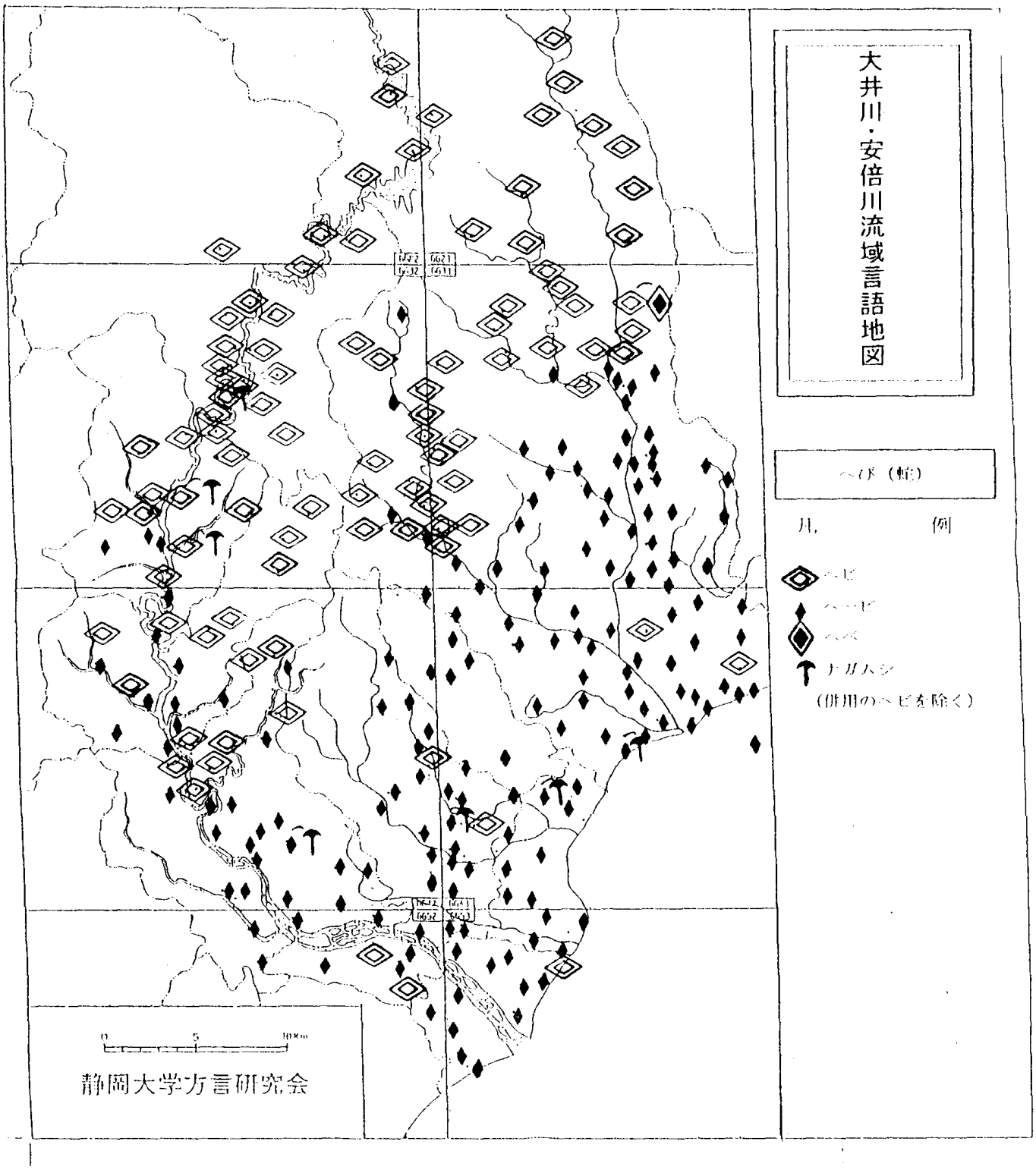

大井川・安倍川流域言語地図
かたつむり（蝸牛）
凡例
カタツムリ
カサツムリ
デンデンムシ
ネンネンムシ
カサンド‥
カサンマイ
カサッハチ
カサッハチマイマイ
マイマイ
マイマイツムリ
マイマイツボ
マイマイドン
マイマイジ
マイマイクジ
マイマイムシ
マイマイシャ‥
マーマンジャ
（併用のカタツムリを除く）
0　5　10Km
静岡大学方言研究会

図９　蛇


大井川・安倍川流域言語地図
ヘビ（蛇）
凡　例
ヘビ
ヘービ
ヘベ
ナガムシ
（併用のヘビを除く）
0
5
10km
静岡大学方言研究会

くこの地域での独自発生と考えてよかろう。このように、分布の成立の事情は異なっているが、いずれも大井川と藁科川流域を含む安倍川のそれぞれの中・上流域が対立している例と考えられる。

これに対し、「蟷螂」(図５)も大井川流域の中・上流域と安倍川流域の中・上流域が対立する項目であるが、この場合、藁科川流域に大井川流域に分布する語と同系統の語が分布する。すなわち、大井川流域にはオガマジ、藁科川流域にはオンガメないしオンガンといういずれも「拝む」という語から生まれたと考えられる語が分布しており、それが安倍川の中・上流域に分布するカマキリ(カマッキリを含む)と対立している。蟋蟀(図６)においても、大井川中・上流域と藁科川流域にはカンナッチョ・カンナッコ・カンナゴ等類似の形式が分布しており、コーロギやコーロンドンが分布する安倍川中・上流域と対立している。このように大井川中・上流域と藁科川流域に共通あるいは関係があると考えられる形式が分布する姿は、アクセントさらには、否定の形式や連母音の融合等とも類似するものである。

B　大井川下流域に分布する語と安倍川下流域に分布する語が対立

下流域に分布する語形が異なる場合、上流域のように高山(およびそれによる川筋の違い)のような明確な境界となるものがないが、おおよそ以下のような境界線が考えられる。

ⅰ)大井川

前述のように、大井川が上流から下流まで境界となる事象はないが、下流域において大井川の右岸のみあるいは左岸のみに見られる語というのはある。たとえば、「鼾」(図７) を表すイグチは左岸にのみ分布する。これは調査地点の密度はこの調査より粗いが『図説静岡県方言辞典』や『日本言語地図』等でも同様の結果が現れる。

この他、燕を表すツンバクロ・ツンバクラを用いる地点もほとんどが右岸である(これ以外に多く分布するのは撥音の入らないツバクロ・ツバクラ)。しかし、これはわずかずつではあるが左岸にも分布する。したがって、語彙においても、大井川自体が境界線となることが確認できる例は非常に稀であると言ってよかろう。

ⅱ)島田市と藤枝市の境界

この場合、下流域だけを見れば、前記の否定の形式および連母音の融合の有無等もここに境界線がある。この他に、語彙項目としては「蝸牛」(図８)があり、以東にはカサッパチが、以西にはマイマイ系の語が分布している。

ⅲ)静岡市と焼津市・岡部町の境界

現在の静岡市と焼津市・岡部町の境界は、かつての安倍郡と志太郡の境界である。ここが境界線となる項目としては、「蟷螂」(図５)があり、以東に

はカガミッチョが、以西にはカマキリが分布している。このカガミッチョ(ないしカマギッチョ)は、蟷螂ないし蜥蜴・金蛇を表す語(図4「金蛇」参照)として関東を中心に分布する語であり、この地域がこれらの語の分布の西端となっている(ただし、「蟷螂」をあらわす形式としては福岡県にもカマギッチョがある)。

この他に、「お手玉」(以東にオジャメ、以西はオジャミ)、眩しい(以東にヒドロシー、以西はヒズラシー)等があるが、オジャメは愛知県や石川県にもあり、またヒドロシーは長野県西部や岐阜県に分布する。逆にヒズラシーは伊豆にも分布する。したがって、これらは全県あるいは全国的な見地からの境界とは言いがたい。さらに、「馬鈴薯」でも静岡市側にジャガタラ等が分布するのに対し、西側にゴガツイモが分布するが、この語の場合は志太郡が中心であり、大井川右岸の榛原郡には見られない。同形の語が福井県北部にも分布するが、直接的な関係は考えられず、また造語法からも独自発生の可能性が高いと考えられる。これに類似するものに「おたまじゃくし」のオホロッコがあり、語の分布における志太郡の独自性も窺われる。

いずれにせよ、この調査における結果から見ると、語の分布においては、駿河と遠江という国の境や島田と藤枝という荘園から江戸時代の藩の境と同様あるいはそれ以上に、志太郡と安倍郡の郡境が分布の境界になることがあるということができよう。

5．大井川流域と安倍川流域の相互関係

上では、主として大井川を中心として、大井川流域と安倍川流域の対立を見てきたが、逆に両地域の関連も当然ながら考えられる。中條編(1982)であげられていた点を再検討しよう。

A　藁科川流域と大井川中・上流域との関連

この両地域については、4．でも見てきたが、藁科川流域に分布する語が、安倍川流域に分布する語と異なりかつ大井川流域に分布する語と関連するものであることが確認できたのは「蟷螂」と「蟋蟀」の2項目のみであった。その他の多くは大井川と安倍川が異なる場合でも藁科川流域には安倍川流域に分布する語が分布している(図11の「竹馬」におけるユキアシのようにいずれとも異なる語形が分布することもあるが、それについてはここでは触れない)。しかし、次のように間接的に藁科川流域と大井川中・上流域の関係が推測できる場合がある。

「蛇」(図9)を表す語で、大井川・安倍川流域両地域共に広く分布するのは、ヘビとヘービである。そして、いずれの地域においても、前者が上流域に、後者が下流域に分布する。しかし、大井川流域に比べると、安倍川流域

図１０　炊く

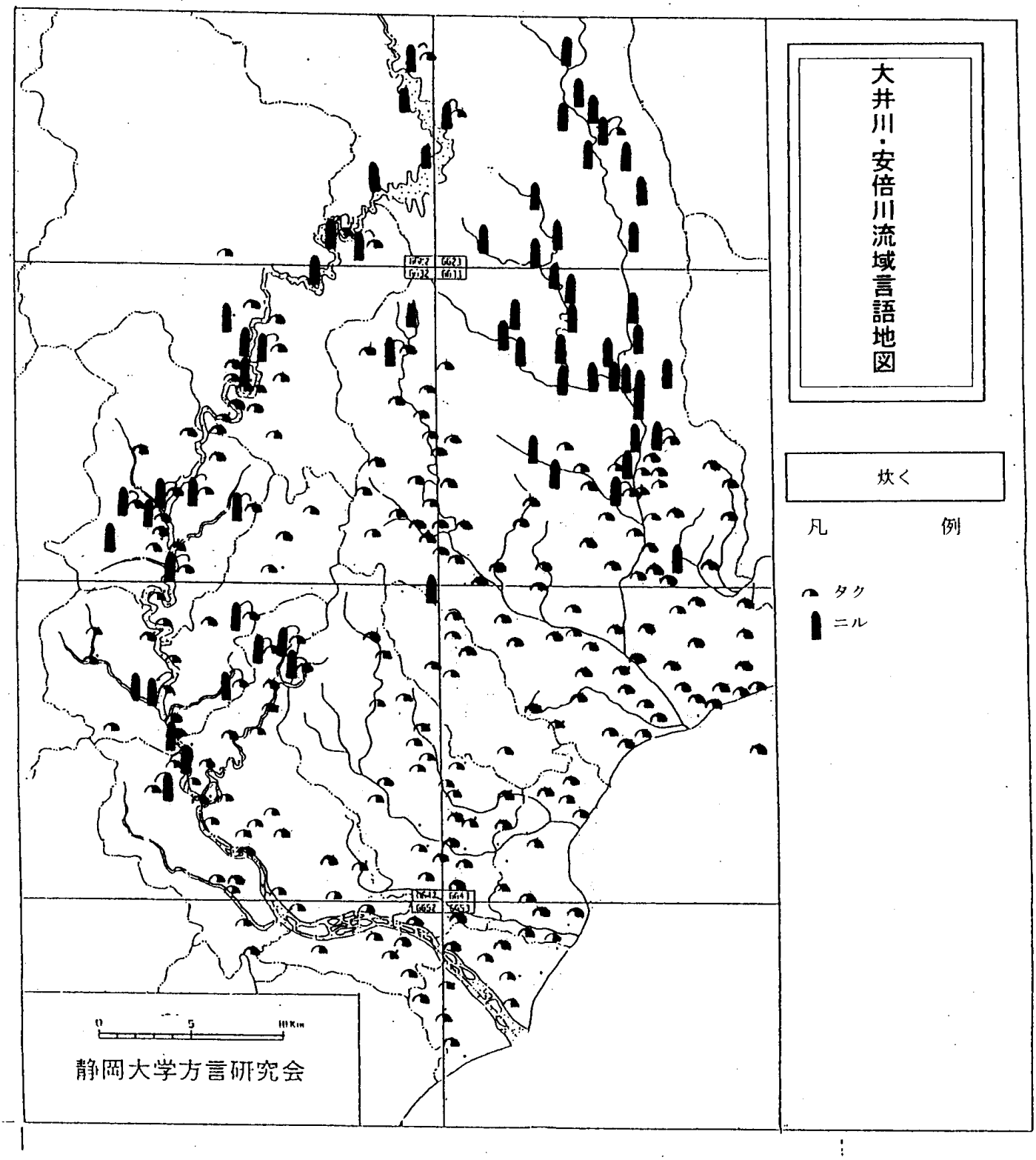
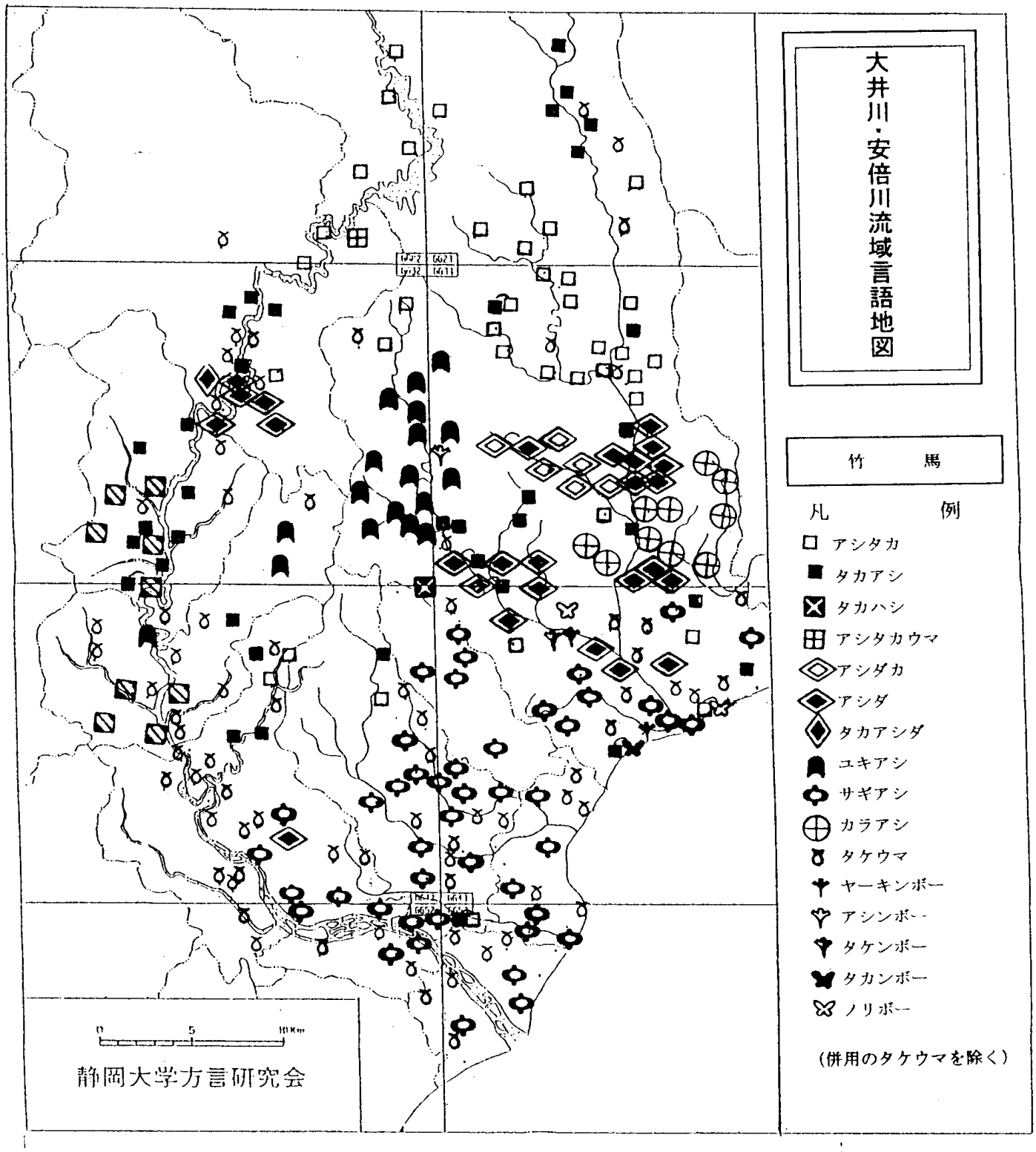


図１１　竹馬


大井川・安倍川流域言語地図
竹　馬
凡　例
アシタカ
タカアシ
タカハシ
アシタカウマ
アシダカ
アシダ
タカアシダ
ユキアシ
サギアシ
カラアシ
タケウマ
ヤーキンボー
アシンボー
タケンボー
タカンボー
ノリボー
（併用のタケウマを除く）
0
5
10Km
静岡大学方言研究会

でのヘービの分布はより上流にまでおよんでいる。それにも関わらず、藁科川流域ではヘビの勢力が強い。中條編(1982)では、この分布のありようを、大井川流域のヘビの勢力の強さが藁科川流域に影響を与えたと推定した。

これに対し、逆に藁科川流域から大井川流域に影響を及ぼし、その結果大井川流域に藁科川流域と同じ語が多く分布する場合も見られる。たとえば「炊く」(図１０）を表す語としては、安倍川中・上流域に広くニルが分布しているが、藁科川流域では、下流域と同じタクが多く用いられている。大井川流域でも、上流にニル、下流にタクという分布の仕方は同様であるが、大井川流域でも本川根町等藁科川流域から山越えの道で通じている地域ではタクが比較的多く用いられており、藁科川流域から大井川流域への影響が考えられる。

さらに、安倍川流域に分布するトッカゲローが藁科川流域に勢力を伸ばせない事情も、中條編(1982)では大井川中・上流域との関係を考えた。すなわち藁科川流域では主にトッカゴが分布するが、この語が勢力を持ち続けている背景には、大井川流域のトッカゴ(本川根町)・トッカギ(中川根町)等、語末の母音の異なるだけの語が広く分布していることがあるであろうとしたわけである。

このように、この二つの地域の影響関係は、一方から一方へいうことではなく、いずれの方向も考えられる。ただし、後で見るように、これは同時期に両方向の影響関係があったのではなく、時間的な差があったとも考えられる。

B　大井川中・上流域と安倍川中・下流域との関連

Aで見たのは、隣接する大井川中・上流域と藁科川流域の関係であった。この他に、項目によっては、大井川中・上流域に、隣接する藁科川流域ではなく、安倍川の下流域からの直接的な影響ではないかと考えられる語が分布する場合がある。たとえば、「竹馬」(図１１)を表す語として、本川根町の南部にアシダという語が分布している。このアシダの分布する地域を囲んでいるのは大井川流域でも安倍川流域でも最も古いと考えられるタカアシ・アシタカおよびそれに類する語である。一方、藁科川流域には大井川流域では３地点にしか見られないユキアシが分布している。このユキアシの分布も問題であるが、ここで問題とするアシダは本川根町から山を越えたところである大川地区や清沢地区には見られず、それより下流および安倍川本流の中流から下流に分布している。もちろん、「足駄」からの類推等でそれぞれ独自に作り出したと言うことも考えられるが、交流がある地域である等の点から、影響関係を考えるのが妥当であろう。そしてその場合、本川根町から安倍川流域へ伝播したとは考えにくく、安倍川流域から、大川・清沢地区を飛び越

して飛び火的に伝播してきたと考えざるを得ない。「蝸牛」（図８）を表すカサンドーも、アシダに比べてその分布域は広く、井川地区にも分布しているが、これについても木川(1997)で安倍川流域から大井川流域へ山を越えて伝播するという考え方を出した。

さて、前述のように音韻あるいは文法事象の場合、藁科川流域には、大井川中・上流域と共通するものがある。そして、それらは安倍川流域にはない、あるいは連母音のようにごく限られたところにしか残っていない現象である。ところが、語彙項目についてみると、逆に安倍川流域に分布する語が大井川中・上流域に分布する場合が見られる。また、少なくとも藁科川流域に分布する語は、大井川流域と安倍川流域が対立するような場合、「蟷螂」や「蟋蟀」等を除くと、安倍川流域に分布する語が分布している。非常に限られた現象のみから推定するのは危険であるが、一つの可能性として、前記のようにかつて藁科川流域は大井川中・上流域と一つの文化圏を作っていたが、その後安倍川の文化圏に移行し、さらに大井川中・上流域も安倍川流域の文化圏、端的に言えば静岡旧市内を中心とする文化圏への指向性を強くしていったという過程も考えられよう。なお、ここで大井川上流というとき、井川地区が問題となる。すなわち、井川地区には、連母音の融合のように、他の大井川流域や藁科川流域よりも安倍川流域と共通するものがある。その一方でアクセントのように他の安倍川流域にはなく大井川上流と藁科川流域と共通する事象もある。これはおそらく、井川地区も藁科川上流域と大井川上流域とひとつの文化的なまとまりをつくっていたが、井川地区は藁科川流域とは異なる経路、すなわち玉川地区を経由し安倍川本流へという経路で安倍川流域と交渉を持っていたため、藁科川流域とは異なる変化をしたのであろうと考えられる。

C　両川の下流域間の関連

さて、両川の下流域は３の②で見たように異なる語形が分布するものも多いが、もちろん共通して分布する語、さらにそれが中・上流域と対立する項目も見られる。典型的なのは、「蜥蜴」・「金蛇」（図４）を表すヘービバンバー、「蟋蟀」（図６）を表すシュートンドン、「土筆」・「杉菜」を表すズンズクシである。これらがどこで発生し、どのように伝播していったかについては明確に出来ない。これらに関して共通しているのは、川根町以北にはこれらの語はほとんど分布しておらず、川根町と島田・金谷の境界付近でこれらの語の分布もとぎれることである。

６．大井川流域内の境界

安倍川流域および井川地区については中條編(1982)で述べてあるので、こ

こでは大井川流域における語の分布のありようを見る。

大井川は、安倍川における藁科川のような大きい支流を持たない。何本かある支流の流域は、さほどの広さを持たず、したがって集落の数も多くはない(川根町東部の笹間川や島田市北部の伊久見川のように比較的大きな支流もあるが、安倍川における藁科川のような規模の支流はない。しかし、これらの地域についても、より精密に見ていく必要はある。特に前者はアクセント等からも興味深い地域である)。そのため、語の分布の境界は比較的単純である。そして、多くの場合それは現在の町の境界とかなり一致する。まず、本川根町の南境に境界線がある項目としては、「蟋蟀」(図6)(カンナッチョとカンナッコ。前者が上流側。以下同様)、「蜥蜴」・「金蛇」(図4)(トッカゴとトッカギ)、「馬鈴薯」(オランダとニドゴ)、「脹ら脛」(ショズトとツト)等がある。本川根町から藁科川流域の清沢地区へという山越えの道は、山越えの道の中でも特に頻繁に用いられたものであり、4.でみたように、本川根町と安倍川流域の交流を示す語も見られる。また、中根町の南境に境界がある項目としては、蟷螂(図5)(オガマジとカマキリ)、「蜥蜴」・「金蛇」(図4)(トッカギとトカゲ)がある。

しかし、大井川流域において最も多くの境界が見られるのは、川根町と金谷町・島田市との境界である。「蛇」(図9)(ヘビとヘービ。前者が上流に分布する語。以下同様)、「蜥蜴」・「金蛇」(図4)(トカゲとヘービバンバー)、「蟋蟀」(図6)(カンノコ系とシュートンドン)、「玉蜀黍」(トーキビとトーモロコシ・トンモロコシ)、「胡座」(アグラとアズクミ)、「肩車」(テングルマとカタクマ)、「土筆」(ツクシとズンズクシ)、「表庭」(カドとオード)、「葱の花」(ボーズとギボー)、「脹ら脛」(ツトとツトッコ)等多数ある。川根町と金谷町・島田市の境界は山間地帯と大井川が作る扇状地の境界にほぼ相当する。すなわち、これより北から山が険しくなっていく。前述のように本川根町と井川地区の間にある接阻峡も大きな障害となっており、大井川流域はこの二カ所で区切られているといってよかろう(ただし、本川町梅地等井川地区に近い地点は井川地区の言葉と共通する所も多い。中條修 1981 参照)。

7. まとめ

以上見てきたように、大井川は東西方言の境界あるいは語の伝播を考える時、考慮に入れるべき自然の障害であるが、川自体はほとんど境界となっていない。しかし、大井川流域と安倍川流域の両地域における方言の分布をみると、川の流域同士が対立する姿は見られる。そのうち、文法事象、音韻・音声事象が対立する場合には、藁科川上流域に分布する事象が、大井川中・上流域のそれと類似・一致することがある。そして、その中には安倍川流域

には過去においても存在しなかったであろう現象もある。したがって、藁科川上流域の状態は、大井川流域から影響を受けた、あるいはそことひとつの区域を作っていたと考えざるを得ないであろう。一方、語の分布については、大井川上流域が安倍川流域の影響を受けたと考えるのが妥当なものが多い。文法・音声事象の伝播あるいは変化に比して語の伝播の方がより短時間で起こるものと考えるなら、このような状態は、藁科川流域さらには大井川上流域における文化の流れの変化が方言分布の上に現れたものと考えられるであろう。

大井川の中・上流域と下流域の方言事象における境界線は、比較的明確にひくことができる。現在の川根町と島田市・金谷町の境界がそれに当たる。ここは、行政的な意味での境界であると共に、自然環境の上でも山間部と大井川の扇状地と境界であり、最上流の井川地区と本川根町の境と並ぶ大きな境界である。また、大井川・安倍川下流域における境界としては、現在の静岡市と焼津市・岡部町の境が、藤枝市と島田市の境などとともに分布の境界となっている場合がある。この地域は平野部であり、必ずしも明確な境界線ではないが、社会的な境界が多少なりとも反映しているように考えられる。

ここで見てきたような、言葉・文化面での境界がどのような意味を持つのか、またここで想定した変化が妥当なものであるのか、さらになぜこのような状態になったのかについては、これらの言葉の分布からだけでは判断しきれない部分が残る。今後、歴史学・民俗学等の成果をあわせ考えていく必要があろう。

参考文献

牛山初男．1969．　『東西方言の境界』自家版．

「角川日本地名大辞典」編纂委員会・竹内理三編．1982．　『角川日本地名大辞典 22　静岡県』角川書店．

木川行央．1997．　「大井川・安倍川流域方言の言語地理学的研究（1）」『静岡・ことばの世界』1:26-37.

木川行央．1999．　「大井川・安倍川流域方言の言語地理学的研究（2）」『静岡・ことばの世界』2:14-21.

木川行央．2000．　「大井川・安倍川流域方言の言語地理学的研究（3）」『静岡・ことばの世界』3:50-60.

木川行央．2001．　「大井川・安倍川流域方言の言語地理学的研究（4）」『静岡・ことばの世界』4:28-45.

建設省静岡国道工事事務所監修．1995．　『東海道　川を渡る道　－渡河の歴史と文化』（社）中部建設協会静岡支所．

国立国語研究所．1966～1974．　『日本言語地図』1～6 大蔵省印刷局．

静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会編. 1987.　『図説静岡県方言辞典』吉見書店.
富山昭・中村羊一郎. 1980.　『安倍川　－その風土と文化－』静岡新聞社.
中條修. 1981.　「本川根町－梅地・長島－の方言」『昭和五十五年度長島ダム水没地域民俗文化財調査報告書』287-344.
中條修・鈴木暹・山口幸洋. 1981.　「郷土のことば」『新静岡風土記　静岡県の歴史と風土』(『日本列島方言叢書９　中部方言考②　(山梨県・静岡県)』所収 159-173　ゆまに書房.)
中條修編. 1982.　『静岡方言の研究』吉見書店.
中條修. 1983.　「静岡県の方言」『講座方言学⑥　中部地方の方言』141-176 国書刊行会.
中條修. 1984.　「連母音の融合に関する諸相の考察－静岡市方言を中心として－」『現代方言学の課題　第２巻』47-76　明治書院.
野本寛一. 1979.　『大井川　－その風土と文化－』静岡新聞社.
松村博. 2001.　『大井川に橋がなかった理由』創元社.
山口幸洋. 1982.　『方言から見た東海道』秋山書店.
山口幸洋. 1995.　「静岡県の「ことば」の歴史」『静岡県史　別編１　民俗文化史』179-212　静岡県.

261-0014
千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1
神田外語大学
言語科学研究科

kigawa@kanda.kuis.ac.jp